

P-253 細菌性陰症のスクリーニングにおける子宮頸部スメア検査の有用性についての検討

神奈川・関東労災病院

袖本武男, 渡邊理子, 星野寛美, 齋藤一夫, 草鹿砥千絵, 関 博之

【目的】細菌性陰症(bacterial vaginosis, B.V.)が早産のリスク因子であるとの報告が多数見られ, 我々の検討でも B.V.を有する妊婦で早産率が高いことを確認している. B.V.の診断方法としては Amsel らによるもの, それに比してより客観的で再現性のあるグラム染色した帯下の検鏡という方法がある. これ以外に子宮頸部のスクリーニングとして施行されている子宮頸部のスメア検査が B.V.の検出にも有用であり簡便であることやコスト面からもその意義を支持する報告がある. 一方, これに対し否定的な報告も見受けられる. そこで我々は子宮頸部のスメア検査が B.V.の検査として有用であるかを検討した. 【方法】平成12年12月より13年1月までの2カ月間に当科においてグラム染色による B.V.の検査を行った妊婦92例について妊娠初期に行った子宮頸部のスメア検査の標本を用いて B.V.の有無の判定を行った. グラム染色による B.V.の検査は妊娠10~14週に施行し, Nugent の scoring system により7点以上を B.V.と診断した. スメア検査においては clue cell を認めるものを B.V.と診断し, グラム染色による判定結果と比較した. 【成績】グラム染色による判定では, B.V.は92例中11例(12.0%)であった. スメア検査の標本を用いた判定では B.V.は12例(13.0%)という結果で, 92例中結果が一致しなかったものは, グラム染色による判定では B.V.ではなかったものをスメア検査による判定で B.V.とした1例のみであった. 感度は100%, 特異度は98.8%, 陽性予測値は91.7%であった. 【結論】子宮頸部のスメア検査は B.V.のスクリーニングとしてグラム染色した帯下の検鏡とほぼ同等の有用性があると考えられる.

P-254 婦人科悪性腫瘍患者における, 血清抗 p53抗体測定の臨床的意義

千葉大

鈴鹿清美, 田中尚武, 三橋 暁, 山澤功二, 松井英雄, 関 克義, 関谷宗英

【目的】乳癌, 肺癌, 胃癌, 大腸癌では血清中に p53タンパクに対する自己抗体が10-30%の頻度で認められる. 本研究では, 婦人科悪性腫瘍(卵巣癌, 子宮頸癌, 子宮内膜癌)における, 治療前血清中の抗 p53抗体価を測定し, その臨床的意義を検討する. 【方法】1. インフォームドコンセントを得られた, 卵巣腫瘍42例(卵巣癌25例, 境界悪性腫瘍3例, 良性腫瘍5例, 胚細胞腫瘍7例, 転移性卵巣悪性腫瘍2例), 子宮頸癌39例, 子宮内膜癌18例について治療前採血し, 血清中抗 p53抗体価を, Anti-p53抗体 ELISA キットを用い測定し, 陽性率を求めた. 2. 卵巣癌の一部の症例では, 手術時摘出標本より小組織片を切り出し, DNA を抽出後, p53遺伝子に対し, PCR-SSCP 解析及び direct sequence を行い, p53遺伝子変異を検索した. 【成績】1. 卵巣癌, 子宮頸癌, 子宮内膜癌における, 血清抗 p53抗体陽性率は, 各々8.0%, 17.9%, 22.2%であった. 2. 卵巣癌・境界悪性卵巣腫瘍において血清抗 p53抗体の存在の有無は, 腫瘍部分における p53遺伝子変異の有無と相関した($P=0.045$). 3. 子宮内膜癌において血清抗 p53抗体の存在は, 高年齢($P=0.006$), 漿液性腺癌($p=0.002$), リンパ節転移の存在($p=0.005$)と関連していた. 【結論】血清抗 p53抗体の存在は, 卵巣癌・境界悪性卵巣腫瘍において, 腫瘍部分における, p53遺伝子の変異を反映している可能性がある. また, 子宮内膜癌においては, 漿液性腺癌・後腹膜リンパ節転移の予知マーカーとしての有用性が示唆された.

P-255 婦人科腫瘍におけるミッドカインの診断的意義

名古屋大

小林穂波, 伊藤則雄, 野村誠二, 水谷榮彦

【目的】ミッドカイン(MK)は細胞の増殖, 生存, 移動の促進など多彩な活性を持つ低分子蛋白である. 癌化に伴い発現が増加することから, 血清 MK は腫瘍マーカーとしても有用と考えられており, 肝臓癌, 肺癌患者での陽性率は5080%とされている. 以前の検討で卵巣癌にも MK の発現を認めたことから, 今回婦人科腫瘍における MK の腫瘍マーカーとしての意義について検討した. 【方法】インフォームドコンセントを取った143名(婦人科腫瘍患者98名, 正常群45名)を対象に, 血清 MK を ELISA 法により測定した. また, 子宮癌細胞での発現確認のため細胞診陽性であった頸癌症例で MK による免疫細胞染色を行なった. 【成績】血清 MK のカットオフ値を500pg/mlとした時の陽性率は, 正常群1/45(2.2%)に対し, 全婦人科腫瘍症例54/98(55.1%), 子宮頸癌8/12(66%), 子宮頸部異形成2/3(66%), 子宮筋腫15/28(54.2%), 子宮体癌7/20(35%), 卵巣癌11/15(73.3%), 良性卵巣腫瘍11/20(55%)であった. 病期や腫瘍径との相関は見られなかった. 免疫染色では扁平上皮癌細胞において細胞膜に MK 発現を認め, 非癌細胞では発現は見られなかった. 【結論】子宮頸癌細胞に MK の発現を認めたことは, 子宮頸癌患者における血清 MK の高い陽性率を裏付けると考えられた. 血清 MK は子宮筋腫を含む婦人科腫瘍において中程度の陽性率を示したことから, 非特異的ではあるものの腫瘍の存在を示唆するマーカーになると考えられた.